

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 26 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284006

研究課題名(和文) フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ

研究課題名(英文) Spinoza: a hidden source of French Epistemology

研究代表者

上野 修 (Osamu, Ueno)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：10184946

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代後半から80年代にかけて、現代フランス哲学思想に到来したスピノザ・ルネッサンスの源流を、フランス・エピステモロジーの系譜上に位置づけた。カヴァイエスからカンギレムへと続くエピステモロジーの系譜上に、アルチュセールとラカンの強い影響下にあった60年代後半のエピステモロジー・サークルがある。彼らの『分析手帖』は構造主義を背景に科学・主体・生命に関する理論的問題の分析を展開したが、これを活気づけていたのがカヴァイエスの「概念の哲学」という理念であり、この理念がスピノザ主義の名のもとに当時のアルチュセール派やラカン派を様々な仕方で活気づけていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：A search for the hidden source of the French Spinoza Renaissance in late 60's. The research revealed that this movement can be traced back to J. Cavailles, an epistemologist of mathematics, praised by G. Canguilhem for his unwavering Spinozism during the Resistance. This image of Spinoza associated with his "philosophy of concept" opposing to phenomenology and existentialism at the time, came down to the Epistemology Circle formed in 66 under the strong influence of L. Althusser and J. Lacan, who were also admirers of Spinoza. The research shows how the magic password of Spinoza animated Le Cahiers pour l'analyse published by the Circle in the late 60's in the aim of epistemological studies in various theories, science, psychoanalysis, mathematics, etc.

研究分野：哲学

キーワード：スピノザ エピステモロジー 現代フランス哲学

1. 研究開始当初の背景

スピノザ(1632-1677)には二つの「ルネッサンス」があった。一つ目はドイツロマン主義の形成過程において、二つ目は1960年代の現代フランスにおいて、である。その時代はラカン、アルチュセル、フーコー、ドゥルーズらの活躍で知られるが、それと重なるようにして、ゲル、マトゥロン、マシュレー、バリバル、ドゥルーズらの画期的なスピノザ研究が相次いで現れる。これは偶然ではないと思われた。60年代前半にエコール・ノルマルを拠点としたアルチュセル周辺のエピステモロジー研究集団がスピノザ主義を合言葉にしていたのである。そしてこのエピステモロジーの系譜をさかのぼるカヴァイエス、カンギレムといった人々がやはりスピノザ主義ないしスピノザへの共感を隠さなかったという事実がある。こうしたことを突き合わせると、フランス・エピステモロジーの哲学的系譜にスピノザ主義の伏流が存在し、これがスピノザ・ルネッサンスの要因の一つであったのではないかという予想が見込みとして出てきた。しかしこれに関する研究は内外ともにまだ見られない状況であった。

2. 研究の目的

フランス・エピステモロジー(科学認識論)の哲学的系譜に伏在するスピノザ主義の存在を洗い出すこと。それによって(1)エピステモロジーの系譜の複雑に入り組んだ多層性を整理し、エピステモロジーの意義を理解するための一つの文脈を与える。(2)と同時に、エピステモロジーの暗黙の参照項たるスピノザ哲学そのもののもつ可能性を明確にする。

3. 研究の方法

文献読解による「個別研究」を基礎としながら、年次計画に従って、順次、その成果の「中規模比較研究」、および「大域的な総合」による系譜作成を試みる。平成25年度はその第一段階として「個別研究」にあて、個別のエピステモロジーのなかでの、詳細な文献読解によるスピノザ哲学の意味づけの実証的な解明に取り組む。具体的には、研究代表者と二人の研究分担者がそれぞれ核となつて、関連する研究協力をフレキシブルかつ有効にグループ化しながら3つの班を構成し、およそ年2回の研究会(大阪大学)に参加する。研究会1回につき3つの班それぞれに3名程度(重複も可)、数名の発表者を立て、3班全員で討論する。研究会は基本的にセミ・クローズドで行ない、集中した議論を実現する。

4. 研究成果

延べ8回の研究会を開いた。そのうちの2回でフランスから招聘された研究者(ギヨーム・ルブラン教授、ウリヤ・ベニス=シナール教授)による講演会を催した。最終年度

の末には研究代表者・研究分担者・研究協力者の総勢11名がそれぞれ成果を論文にまとめ、2日にわたってピア・リーディングと集中討議を行ない、最後は3つの研究班のチームで鼎談「総括と展望」を行なった。これらの結果は論文集となって出版される予定である。

研究会の詳細は次の通り。講演も含め延べ29の発表があった。

・第1回研究会 2013年12月7・8日 (大阪大学豊中キャンパスにて)

上野修：ラカンのスピノザ(予備的考察)
市田良彦：「僕はスピノザについて本を書くことに決めた」アルチュセルのスピノザ・ノート(1962)

中村大介：20世紀前半のスピノザ主義の一断面 プランシュヴィックの哲学を中心に

近藤和敬：カヴァイエスのスピノザ主義の再解釈の試み l'absolu d'intelligibilitéの肯定

藤井千佳世：カンギレムからスピノザへ生物学モデルのスピノザ解釈の一契機についての考察

米虫正巳：主体の生? ドゥサンティとそのスピノザ主義について

・第2回研究会 2014年3月8・9日 (大阪大学豊中キャンパスにて)

信友建志：《他者》の犠牲から「新しいシニフィアン」へ

原田雅樹：ヴェイユマン『代数学の哲学』は、代数学的秩序に即して論証されたエチカか?

坂本尚志：エピステモロジー・サークルのスピノザ 構造と主体をめぐる問い

藤野幸彦：アラン・グロリシャル「18世紀における在る心理学実験」

阿部倫子：ジャック・ブーブレス「数学の哲学と哲学的病の治療法」ウイトゲンシュタインにおける「存在論的」見かけの批判

大塚高弘：ジャック=アラン・ミレール「構造の行為」

小田裕二郎：ベルナール・ポトラ「政治的主体とその利益について：権威のヒューム主義的理論に関するノート」

・第3回研究会 2014年7月26・27日 (大阪大学豊中キャンパスにて)

ギヨーム・ルブラン：対抗文化としての哲学

上野修：スピノザの幾何学的証明について
近藤和敬：カヴァイエスのスピノザ主義をめぐる若干の論点について

中村大介：カヴァイエスのスピノザ主義の一断面 概念とコナトゥス

・第4回研究会 2015年3月7・8日 (鹿児島大学法文学部にて)

近藤和敬：Knox Peden, Spinoza Contra Phenomenology (2014) について

中村大介：現象学のプリズムから見えるスピノザ主義 カヴァイエスのフッサール解釈再考

杉山直樹：スピノザの方へ？ 反デカルト的方法観の諸動向と帰趨

②①米虫正巳：ドゥルーズ/スピノザとゲルーフヒテ

②②朝倉友海：ドゥルーズにとってのスピノザ

②③上尾真道：科学の主体と精神分析の対象 ラカンのエピステモロジーの遍歴

②④信友建志：後期ラカンにおける女性の論理と直観主義について

②⑤小田裕二郎：欲望は人間の本質である スピノザとラカンにおける主体とその欲望

・第5回研究会 2015年6月6・7日 (大阪大学豊中キャンパスにて)

②⑥ウリヤ・ベニス=シナスール：ジャン・カヴァイエス：概念の哲学 その下部構造の諸要素 (Hourya Benis Sinaceur: Jean Cavailles : La philosophie du concept Éléments d' infrastructure)

・第6回研究会 2015年8月31 (大阪大学豊中キャンパスにて)

②⑦坂本尚志：『分析手帖』とスピノザ 構造と主体への問い

②⑧信友建志：二人のスピノザ ミレール=バディウ論争の一側面を見る

②⑨藤井千佳世：概念の哲学から生命の哲学へ カンギレムによるスピノザ主義の展開

・第7回研究会 2016年2月27・28日 (大阪大学豊中キャンパスにて)

ピア・リーディングと集中討議

・第8回研究会 2016年3月22 (大阪大学豊中キャンパスにて)

上野修・米虫正巳・近藤和敬：鼎談「総括と展望」

以上の研究会から次のことが得られた。

・現象学や実存主義に対抗する「概念の哲学」によって戦後のエピステモロジーに大きな影響を与えたカヴァイエスに、確かにスピノザ主義が存在することが確認された。

・人間主観ではなく学知(科学)そのものの内在的必然性による生成というカヴァイエスのスピノザ的テーマが、ラカンの強い影響のもとにあったアルチュセール派ノルマリアンたちのエピステモロジー・サークルに受け継がれ、60年代後半、構造主義・マルクス主義を背景とした科学認識論と精神分析の統合の試みとしての彼らの『分析手帖』の刊行を理念として導いていたことが裏付けられた。

・この雑誌を支援した生命科学のエピステモロジスト、カンギレムがレジスタンスで斃れ

たカヴァイエスのスピノザ主義を称揚していたこと、そしてこの雑誌に大きな影響力を及ぼしていたラカンのスピノザ鼻肩が精神分析の理論的な背景を持っていたことが確認された。

・またカヴァイエスとメルロー=ポンティの教えを受けたドゥサンティの現象学への批判的スタンスのうちに、彼の変わらぬスピノザへの共感の存在を認めることができた。ドゥサンティはちょうどマルクス主義、精神分析、現象学、エピステモロジーといった思潮の交差点に位置することがわかった。

・他方、スピノザ研究に一時代を画した哲學家ゲルーフは一見無関係に見えるが、実はその学知分析の手法がアルチュセール派ノルマリアンたちに与えた影響は小さくなく、彼らの内からスピノザ研究へと向かう者達が輩出したことが跡づけられた。

・エコール・ノルマルの外にいたドゥルーズによるスピノザの称揚も、同時代のエピステモロジーと哲学史研究のこうした動向への考慮なしには十全に理解されないことも明らかとなった。

・全体として、現代フランスにおけるスピノザ・ルネッサンスの震源がエピステモロジーの系譜に伏在するスピノザ主義として確かに存在していたこと、そしてそれが「意識の哲学」への対抗、ひいてはヘーゲル的なものとの差異化を強い動機としていたことを、大きな構図として描くことができるところまで来た。

まとめれば、『エチカ』に見られるようなスピノザの幾何学的精神がエピステモロジーの系譜に伏流として存在し、学知の理論と主体の倫理、そして非ベルクソンのな生の哲学という三つの可能性への問いとして暗黙の参照項として機能していたことを突き止めたこと、これが本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

米虫正巳、「生という場所—生の現象学と歴史的現象学」、『ミシェル・アンリ研究』、査読なし、No.3, 2013, 49-69

近藤和敬、「問題・認識論と問い・存在論」、『現代思想』、査読なし、42:1, 2014, 58-73

近藤和敬、「カヴァイエスの「一般化の理論」の形式化に向けた考察」、『人文学科論集』、査読なし、No.79, 2013, 17-28

上野修、「まなざしなき無限、記憶なき永遠—スピノザの奇妙な形而上学」、『哲学』、査読なし、No.65, 2014, 56-72

Masami KOMEMUSHI, “Entité=Evenement”、

『哲学研究年報』、査読なし、No.48、2015、1-10

近藤和敬、「存在論をおりること、あるいは転倒したプラトニズムの過程的イデア論」、『現代思想』、査読なし、No.43、2015、200-215

上野修「アンリとスピノザ、その近さと遠さ」、『ミシェル・アンリ研究』、査読なし、No.5、2015、1-13

米虫正巳、「出来事と存在-ドゥルーズとハイデガー」、『アルケー』、査読なし、No.23、2015、55-67

近藤和敬、「エピステモロジーの伏流としてのスピノザ、あるいはプラトン」、『鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集』、査読なし、No.83、2015、43-55

近藤和敬、「科学のシニシズムに抗して：エピステモロジーの挑戦」、『談：speak, talk, and think』、査読なし、No.106、2016、57-75

〔学会発表〕(計9件)

近藤和敬、「数学のエピステモロジーの可能性について 家アイエスの「概念の哲学」を基軸として」、『応用哲学』、2014.05.11、関西大学

米虫正巳、「出来事と存在-ドゥルーズとハイデガー」、『関西哲学会』、2014.10.25、関西学院大学

上野修、「実在論の極北、スピノザ」、『学習院大学哲学会』、2015.06.27、学習院大学

近藤和敬、「バディウにおける数学と政治とその諸問題 『存在と出来事』を中心に、現代思想と政治研究会、2015.07.19、京都大学人文科学研究所

近藤和敬、「ドゥルーズはシモンドンの議論をいかに理解し使用したか ドゥルーズの忠実さと過剰さ」、『日仏哲学会ワークショップ「ドゥルーズ哲学と先行者たち リュイエル、マルティネ、シモンドン」』、2015.09.11、立教大学

坂本尚志、「『分析手帖』とスピノザ 構造と主体への問い」、『日仏哲学会2015年度秋季研究大会シンポジウム「現代フランス哲学の知られざるスピノザ」』、2015.09.12、立教大学

信友建志、「二人のスピノザ ミレール=バディウ論争の一側面を見る」、『日仏哲学会2015年度秋季研究大会シンポジウム「現代フランス哲学の知られざるスピノザ」』、2015.09.12、立教大学

藤井千佳世、「概念の哲学から生命の哲学へ カンギレムによるスピノザ主義の展開」、『日仏哲学会2015年度秋季研究大会シンポジウム「現代フランス哲学の知られざるスピノザ」』、2015.09.12、立教大学

上野修、「動物ノ精神、ドゥルーズとデリダ」、『脱構築研究会×ドゥルーズ科研共同ワークショップ』、2015.12.20、グランフロント大阪

〔図書〕(計3件)

上野修、『哲学者たちのワンダーランド 様相の十七世紀』、講談社、2013、276頁

近藤和敬(訳・解説)ジャン・カヴァイエス著『論理学と学知の理論について』、月曜社、2013、186頁

上野修『スピノザ『神学政治論』を読む』、筑摩書房、2014、309頁

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野修 (Ueno Osamu)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：10184946

(2) 研究分担者

米虫正巳 (Komemushi Masami)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：10283706

近藤和敬 (Kondo Kazunori)
鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：90608572

(3)連携研究者